

北條裕雄氏を偲んで

財団法人 日本証券経済研究所 大阪研究所
所長 中 村 稔

当日本証券経済研究所大阪研究所主任研究員であった北條裕雄氏は、昨平成8年9月に出張先のニューヨークで急逝された。まだ44歳の若さであり、気鋭のエコノミストとしていよいよその本領を発揮し、脂の乗った仕事が期待されていただけにまことに痛恨の念に堪えない。

故人は別掲の略歴にみられるように、昭和59年、東京大学大学院経済学研究科博士課程を経て、社団法人証券投資信託協会に奉職され、ご活躍のあと、昭和63年4月から大阪研究所に勤務された。この間の業績は巻末に掲載したが、経済学博士号を取得された『現代アメリカ資本市場論』をはじめ、アメリカの資本市場を中心に数多くの優れた著書や学術論文を発表されており、最近では研究分野をアメリカからアジアへ展開されていた。また毎月発行の『証研レポート』をはじめ『証券経済』、『証券研究』、『証券経済研究』にほぼ途切れることなく精力的に執筆される一方、いくつかの大学での非常勤講師や関西証券学生連盟のチューターを引き受けて証券知識の普及に努められた。

北條氏は現代金融研究会やグラス＝スティーガル法研究会等当研究所の各種研究会の中心メンバーとしても活躍された。これらの研究会が主として東京で開催されたことから、頻繁な東京出張というハードなスケジュールにもかかわらず、持ち前の粘り強さでこれをこなし、多大の貢献をされてきた。また大阪地区では日本証券業協会大阪地区協会や大阪証券取引所の依頼を受けて研究会への参加や講演を行い、証券界の発展に大いに尽力された。

このように氏の活躍は多方面にわたり、しかもその取り組む態度はまさに真摯そのものであった。いつも研究員の中では朝一番に出勤し、夜は自宅で遅くまで研究に勤しむ一方で、若い研究員のよき相談相手ともなっていた。また、所内の円滑な運営に人一倍気を配るなど、その真面目で誠実な人柄は所内はもとより所外の多くの人からも慕われていた。

私自身は、当研究所に赴任して3年足らずと短期間であるが、前任の大阪証券取引所在職中から氏との付き合いは長かった。とりわけ、カントリー・ファンド導入に際しては、専門家である北條氏の手を何度も煩わしたが、度重なる厚かましい依頼にも快く引き受けてもらったことがいまでも鮮明に印象に残っている。

北條氏は同じ大阪研究所の松尾主任研究員らと共にコロンビア大学のマーク・ロー教授の著書を翻訳し、昨年4月、『アメリカの企業統治』として出版された。本誌の最後に専修

大学宮本光晴教授による同書の書評を掲載したが、原文が非常に難解であり、監修を担当した北條氏の負担と労力は相当のものであったと聞いている。今回のアメリカ出張の目的のひとつは、そのマーク・ロー教授を囲むワークショップを開くことであった。北條氏は、その司会役を無事努め終えた日の夕刻に意識を失われ、回復することなく亡くなられた。研究者としてまさに壮絶な最期である。

当研究所はもとより学界にとっても惜しみても余りある北條氏の急逝をいたみ、『証券経済研究』第7号を追悼号として、大阪研究所の現役研究員全員を含む東西研究所の有志で執筆し霊前に捧げることとした。ここにあらためて心からご冥福をお祈りする次第である。